

連載

# 拝聴！ニッポンの工場長

第47回

メルシャン  
執行役員  
藤沢工場長  
大金 修氏

安心して働けて成長できる  
多様性にあふれる環境づくりが  
思いやりに満ちた  
メルシャン（感謝する人）を育む

**国**内製造ワイン生産量日本一を誇る神奈川県。その神奈川の生産量の95%を占めているのが創立100年を迎えたメルシャン藤沢工場。ワインをはじめウイスキー、リキュールなど日本酒、ビール以外の酒類を生産、日本の酒文化の醸成に貢献してきた。執行役員で工場長の大金修氏はキリンビールの醸造技術者として長年、生産管理や技術開発などを担当。2018年に同工場に異動してからは生産量はもとより、日本一、健康と安全安心に気遣った多様性あふれる工場の実現を目指し、従業員の成長支援に取り組んでいる。

## メルシャン(株) 藤沢工場

1920年操業開始。メルシャンの主力工場として日本酒とビール以外のワイン、ウイスキー、リキュールなど630SKU<sup>®</sup>の酒類を製造。ワイン生産においては国内トップの生産量を誇り、生産量日本一の神奈川県において95%のシェアを占める。従業員約200名(契約社員含む)。敷地面積40,000㎡。

※国税庁管理課長酒税課「国内製造ワインの概況」(2020年2月)よりメルシャン推計

所在地 〒251-0057 神奈川県藤沢市城南4丁目9-1

## 高校時代に読んだ バイオテクノロジーの本に感銘 著者のいる大学の門を叩く

— 小学校は外では釣りにハマり、家ではブロック遊びに興じていた大金少年。高校時代に読んだバイオテクノロジーの本に感銘し、その著者のいる大学の研究室で学ぼうと進路を決心。見事大学合格するが、その教授の研究室の人気の圧倒的で、別の研究室で生物工学を応用したバイオリアクターを研究した。

小学校時代は外では友だちと釣りばかりしてました。釣りって、重りや針の長さの違い、餌の付け方のちょっとした工夫で釣果がぜんぜん違うんです。それが面白かった。それと家ではトイブロックにハマってました。お城をつくったり、飛行機をつくったりするのが得意でしたね。あまり本は読まずに、そんなことばかりやっていた(笑)。

私は91年にキリンビールに入社したのですが、遡るとそのきっかけは、高校時代に読んだ村上和

雄先生のバイオテクノロジーの本でした。面白くて「この人のところで学びたい」と思って、その大学を目指したんです。ただ無事入学できたものの、村上先生の研究室はすごい人気で、「ちょっと難しそうだな」と思い、隣の隣にあった別の研究室に入りました(笑)。

村上先生のところは遺伝子操作を研究していて、私が入った研究室は、微生物や酵素などの力を利用して化学反応を起こすシステム、バイオリアクターの研究をしていました。将来性があるなと思ったんです。

当時は環境やエネルギー問題が注目されていて、バイオリアクターでトウモロコシなどの穀物から燃料をつくる研究などがされていました。私もいずれそういう環境にやさしい燃料が主流になると思って研究していましたね。

キリンビールに入ったのは単純にビールが好きだったから(笑)。当時はアサヒビールさんの「スーパードライ」がすごく人気で、アサヒさんの採用試験も受けました。

キリンは当時から発酵技術を活かして乳製品などの食品事業や医薬品分野に進出して、多角化を図っていました。順調というわけではありませんでしたが、地道に研究を続けている。その真摯な姿勢・社風が自分に合っていると思ったんです。それにバイオテクノロジーはもともと発酵技術の応用でもあるので、自分の研究が活かせるなと思ったんです。

## 事業多角化時代に入社 「ビールの中味をやりたい」と手を挙げ ビール醸造研究・現場を歩む

——入社後所属したのはエンジニアリング事業部。当時のキリンはさまざまな多角化に取り組んでいた時代。乳製品事業、スポーツやレジャー施設などの運営も行っていたが、大金氏が携わった事業は次第に縮小。生産本部技術研究所に異動となった。以後生産本部を軸にビールの醸造の研究、現場を歩む。

入社時のキリンビールは、事業の多角化を目指して先に挙げた食品、医薬のほか、横浜の赤レンガ倉庫や横浜アリーナの施設運営などさまざまな



ワインの製造ライン。国内製造ワインの生産量では神奈川県が1位。その約95%が藤沢工場で生産される。原料ブドウ果汁・原料ワインは世界各国から厳選調達している

事業に取り組んでいました。ただうまくいかないものもあり、私の携わっていたエンジニアリング事業も次第に事業が縮小し、異動することになったんです。私は「やるならビールの中味をやりたい」と手を挙げて、生産本部に移りました。ビールの王道をやるわけですから、嬉しかったですね。

キリンビールは結構異動が多い会社だと思いますが、それは環境が変わることで人財育成や成長の機会になると考えているからだと思います。社員のキャリア形成を基礎期、応用発展期、貢献期と大きく3つのフェーズに分けて異動させているのですが、私自身、振り返ってもその節目で成長していますね。

最初の節目は基礎期が終わった入社7年目頃で、新プラント建設と運営を任された時。辛かったけど楽しかった。長時間働いても元気でしたね。プロジェクトメンバーとは朝昼晩と3食ずっと一緒にだったこともしばしばありました。

次は本社へ異動になった2010年頃。本社は大変そうなのでなるべく異動にならないようにしていたんですが(笑)、異動で意識は変わりました。それまで技術しか知らなかったのですが、財務や組織運営、人財育成など、一段高いレベルで物事を見ることができるようになりました。

さらにその上の会社のミッション、ビジョンとか、そこで自分は最終的に何をすべきかを真剣に考えられるようになったのは副長になった2014年頃からだと思います。

憧れの先輩がたくさんいて、異動先ではいつも「すごい人がいるな」と刺激を受けていました。ただ私はいつも自分なりの道を探るようにしていま